

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

提督と敵と艦「娘」と「艦」娘

【作者名】

M u h k

【あらすじ】

1985年、一人の少佐に任された、特殊鎮守府再設置。
20年前に起きた、艦娘による総攻撃作戦とその結果。

なぜ、提督は、提督となったのか。

そして戦いの先に何を得ようとしているのか。

本編は艦娘視点で綴ります。

プロローグ「ミカタ」

「私は、間違っただけで、いなかったはずだ。」

地響きが絶えぬ地下壕の中で、しきりに鼻の元に手を当て、髭の様子を気にする仕草を繰り返す小男が呟いた。

「強い国、強い国民、強い経済。全て幸せになる事を、どうして世界は邪魔をする？」

「世界とは何だ。私が居ない、私を慕うものも居ない、この国もない、それが世界で有るはずが無い！」

「なら、この私を追い詰めてくる奴らは、一体なんなの？ 異形か？ 人ではない何者か？」

目を伏し、腕を組み、思考をするその男は、外から見れば未だ正気の様子だったかもしれない。しかし既に、彼の目には狂気が宿っていた。

そこに、一際大きな爆発音が聴こえたかに思えた、その時。

アナタヲ、オイツメルノハ、ヒト、デハ、ナイノ？

「ん…誰だ…？」

アナタモ、ヒト、ヤメタラ？

「誰だ！」

アナタヲ、オイツメテイル、ノハ、ナアニ？

「海を越えてまで、我が臣民を殺しに来る、あの馬鹿共に決まってる！
いい加減正体を見せる！」

男が視線を上げると、ここ数日で見慣れてしまった重苦しい壁も、色が付いていそうなほど淀んだ空気も、すでに無かった。

いや、場所ですら無かった。

いや、ヒトガタは居た。

いや、身体のおちこちから鋼鉄が生えていて、瞳の位置には、漆黒しかないモノを、ヒトガタと言えるかどうか。

そして、自分とヒトガタらしきモノ、しか無かった。

「……はどいっだー！」

ココ？

ココツテ？

ワタシ、ト、アナタダケ、ヨ？

プレイス、カラ、ハズレタ、ダケ。

「何だこれは……奴ら神経ガスでも投入して来たのか!？」

アナタ、アノ、プレイス、ニクイ？

「は……はは……何だか判らんが、それにだけは答えてやる。ああそうだが、私に反対するもの、私を慕う者に反対するもの、全てが敵だ!」

ナラ、ソノ、テキヲ、ケシテアゲル。

「消す? だと? ははは、やれるもんならやってみろ。勲章なら山ほどくれてやる。」

ソウ。ジャ、アナタニハ、アノ、プレイス、ノ、アースヲ。

ワタシ、ハ、アノ、プレイス、ノ、シーヲ。

アナタ、シー、ハ、テキ、クル、イッタカラ。

ゼンプ、ゼーンプ、モラツテ、アゲル。

「お前は一体何を言ってる…ん…だ…?」

ワタシ、プレイス、デテミタイ。

アナタ、プレイス、ノ、シー、ニクイ。

ワタシ、アナタ、ノ、テキ、チガウカラ。

敵? 味方? 海? 大地? だと?

いや、そもそも、これは会話なのか?

そもそも俺は、何処に存在しているんだ…?

アラ、アナタ、タマシイ、キエチャウ?

俺は…

何処に…

何を…

…

アアア、キエチャッタ。

アノ、プレイス、ノ、イシキ、ナンデ、ニクタイ、キエルト、タマシイ、キエル、カナ?

「ウフフ、デモ、ヤクソク、デキチャッタ。」

「アノ、プレイス、ノ、シー。タノシイト、イイナ。」

1945年4月。

世界大戦は、戦いの中心であった帝国の、全面降伏で終わるはずだった。

しかし突如として、海に現れた異形と、沈没したはずの船による海上封鎖が始まった。

その異形は、それまでの戦争で海に落ちたあらゆる船を、変貌した形で再生し、人の乗る船に襲いかかった。

海の上の空すら例外ではなく、何故飛ぶのかすら分からない形状の飛行機が、すべての海上の制空権を奪い去った。

1945年7月。

ようやく事態を把握した各国は、補給が途絶え、既に戦争の体をなしていない戦いに「停戦」を宣言する。

1945年10月。

パリにて開催された首脳会議において、日本を含む世界各国の暫定統治域、及び対処すべき異形の割り当てが決定された。

異形の棲みかは、太平洋に2つ、大西洋に2つ、インド洋に1つ。しかし、異形が率いる亡霊艦は、いつどここの海上でも遭遇することが判明しており、実際に戦いを挑むだけの戦力を維持しつつ、そこに到達することはほぼ不可能であった。

この為、この割り当ては、戦う相手を決めるといふよりも、輸送維持の為にシーレーン確保分担の決定という方が正しいものであった。

1945年12月。

首脳会議から帰還した日本代表により、世界状況の詳細が伝えられた政府は、既にこの時点で崩壊寸前であった海軍軍備を、すべてシーレーン確保に費やす事を決定した。

日本が確保できたシーレーンは、朝鮮半島と日本の間のみであり、日本が頼る全ての資源輸送は、この細い1点のみとなった。

陸軍は解散され、日本は大陸方面における権益をすべて放棄した。既に日本は、国内の食糧と、最低限の文化を維持する為の物資を確保するためだけに、全力を尽くさなければならぬ状況だったのだ。

そして、それから40年後。
未だに、世界は、海を得ていない。

EP00・「艦」

「関根君、ちょっと良いかな？」

平智3年（1985年）5月、霞ヶ関海軍省。

関根小佐は、廊下で呼びとめられた。相手は肩に星が乗っている、将官様である。

礼儀として1mmの隙もない敬礼を返すが、相手はどうにも、老獪なようだ。

「いつ見ても、完璧なのに尊敬の念を全く感じさせない敬礼だな、関根君？俺には構わんが、他人にその敬礼は止めとけ。君を推しにくくなる。」

「私を推すなんて酔狂な上官は、少将殿だけであります。」

「まあそう厭味を言うな。満身に動く船もない海軍には、官位で遊んでる連中しかおらん。やりたい事をやる為には、心の中で舌を出すのも控えにゃ。」

相手は、小林少将。既に数少ない、大海を知る生き残りであった。

「それでだな、関根君。君が前から提案していた、特種鎮守府再設置の件だが、何とか通りそうだ。」

「それは、本当ですか？いえ、この言い方が失礼なのは承知しておりますが、まさかという思いが強すぎまして…」

「君が思っている以上に、あの件を悔しがっている奴らは多い、ということだ。とはいえ、予算は殆ど分捕れない。実績が上がらねばな。」

「無い物をかき集めてその場でなんとかするのは、十分に経験させていただきましたので。」

「またそういつ言い回しをするか、君は。まあいい。任命は来月頭で、君がその特鎮の実務頭だ。君は既に分かっていると思うが、その任命

までの3週間、熊野へ行つてこい。」
「分かりました。」

小林少将に再度敬礼をした関根は、足早にその場を去る。

その時の敬礼は、最初の敬礼と寸分違わない物だったはずだが、恐らくそれを見た者は、全く違う印象を受けただろう。

(熊野、か。こんなに早く、あの婆さん達に、また会いにいかねばならない時が来るとは…)

国内で唯一、長距離幹線で電化されている新東海道線と、ローカルディーゼル線を乗り継ぎ、関根が熊野に到着したのは、2日後。

熊野古道最奥の、名もない道が上がった場所にある、目立たない社にたどり着いた関根を迎えたのは、齢を推測することすら難しそうな、老齡の巫女であった。

「久方ぶりじゃな。20年前に泣きながらワシを殴った小僧が、立派になつたもんじゃない。」

「その節は失礼を…」

「礼儀なんぞワシには不要じゃ。まずは名を寄せ。」

「はい。帝国海軍少将、関根 守 です。この度は、特別鎮守府の再設置に向けて、お話を伺いに参りました。」

「守と書いて、“まもる”か。その字、“かみ”とも読む。名に縛られたな、守とやら。」

「私は縛られた事自体を悔いてはおりません。それを果たせていない事には身を焦がす程に悔いております。」

「困つたもんじゃない。念、願、誓、讐、全ては『あれ』には極上の餌にしかならんといつのに…」

「私は、不適格だと?」

「更に困ったことに、お前等が呼ぶ、特鎮とやらの仕事には、適格過ぎてな。」

「ならば、是非にも。私は、戦いを続けねばならぬのです。理由はご存知でしょう。」

「ワシ達に、また、童女を死地に送る用意をさせると?」

「ここで、守は、10年掛けて用意してきた言葉をようやく吐きだす。「死なせません。逝かせません。囚わせません。私は、前の特鎮を作った下衆とは異なる方法で、戦いますゆえ。」

「ふん。心意気は立派だが、死地に向かわせる決断をさせるのは、お前の意思ではなく、民の総意よ。それに抗う事が出来る覚悟はあるか?」

「例え、七千万国民全ての総意であろうとも。」

老齢の巫女は、更に皺を増やす表情を示し、ため息交じりに言った。「…分かった。もう一度だけ、『あれ』と戦える術を整えよう。これから10日、お前にはみっちり教えるでな。」

その言葉を聞いて、初めて守は、安堵の顔を見せた。

ようやく、自身の手で、目的に進む事が出来るという確信。

何かを果たしたという達成感ではない。が、今までそれに着手することすらできなかった時間に比べれば、待ちつける困難など、むしろ幸せだろう。

「ありがとうございます。正直、こんなに素直に、お話を通していただけるとは思っておりませんでした。」

巫女はその表情、感情すら、予測していたであろう。そして、この先、どんな事になるかも。

それでも、ここで初めて、自身の言葉を紡いだ。

「ワシもな、こんな歪んだ時にはもう飽いた。本来であれば、神だのなんだのに頼らず、人は人の力だけで、世界が進んでおったはずなのだから。」

その言霊は、人には決して理解される事の無い、神の言葉だったのかも知れない。

EP1・「勝」 初戦／漣

「駆逐艦、漣です。こう書いて、さざなみと読みます。覚えてくださいね、提督。」

平智3年8月。

うだるような暑さの、呉に置かれた特別鎮守府で、私は守と出会った。

鎮守府とは名ばかりのプレハブ小屋、居るのは自分と雑務を請け負う数人の女性だけらしい。

確かに、熊野で教わった通り、私は最初の艦娘ってことみたい。

そして、目の前に居る男の人は、ちょっと自我が強そうに見える。そんな男に、生殺を握られると考えるだけで、滅入りそうになっちゃうけどなあ。

「提督…提督ね。確かに提督の仕事はしているが、中佐でそう呼ばれるのはちょっと困ったもんだな。」

「そんな事言われても、提督は提督ですからね？これからよろしくお願ひしますね。」

「うーん。出来れば、名前が良いんだがなあ。あと、ここは軍隊調は禁止だ。提督と呼ぶのはまあ、構わないけど。口調も態度も、今までと同じにしてくれ。これは命令だ。」

これはまた、難しい事を頼んでくる提督だ。

軍に徴用しておいて、“今まで”と同じにしるだとか、無茶も良い処だと思つなあ。

「わっかりましたーじゃあ、私割と失礼なことバンバン言っちゃいますけど、それでいいのですかね？」

「ああ、どしどしくるっ。」

「怒りだす？」

「そこまで自由にさせたつもりはないって諭す？」

「ああ、それがいい。その方がこっちも楽だし、何より俺が勘違いしなくっていい。」

「えっ？これ認めちゃうんだ？」

「ええと、あの、私にこういうの認めちゃうと、後から来る娘達に示しが付かないですよ？」

「あはは、それは君が心配することじゃないし、第一、示しなんて付ける必要なんか無い。俺は、君たち艦娘には、艦であることより先に、娘であることを望むよ。」

「ははーん。そうきたか。そんなので私になつくと思ってるなら大間違い。」

「口先では自由にさせる事を言っておいて、都合良く扱おうってことだよな。」

「珍しいタイプではあるけど、こういつのに限って、後で面倒なんだよなあ。」

「そ。じゃあ、楽させてもらいます。」

「そうしてくれ。ああ、それと、作戦の事は来週から始めるから、まずはその艦装に慣れておいてくれるかな。」

「練習と教育は、熊野で散々やらされましたよっ。」

「それはそうだろうけど、海はまだ走ってないだろうしね。なににより人間は、身体にそんなもの付けて生活することに、1カ月そこらで慣れる訳が無い。時間があるわけじゃないが、まだ作戦は立案中だ。ちよっとそこらで遊んでてくれ。」

「立案中って。いままで何してたのよ？この提督……」
「君たちを、育てる為に、無い知恵を絞ってたのさ。」

今、なんていったのこの提督？

育てる？私を？艦娘になった私を？

「ちょ、ちょっと、おかしいでしょ？私達は艦娘。戦って戦って、いざとなれば深海棲艦にぶち当たって

パーン！と、良い音が鳴った。

提督が両手で鳴らした、1つの拍手だった。

「どんな態度も、どんな言葉も許す。というか自由にしてほしい。けど、自分は戦って死ぬ、という事だけは考えるな。それも、命令、だ。」

そっか。本当なら、私の頬でも鳴らしたい所だったんだろう。意外。

「どっやらちょっとは、長生きさせてもらえるのかも知れないですね？提督」

「かも知れない、じゃないつもりだ。だからまあ、徴用しておいてぶざけんなど思ってるだろうが、そんなスレた考えせずに、普通に女の子しててくれ。ああ、これは命令じゃなく、お願いなんだが。」

「分かりましたよ、て・い・と・くー！」

「おま、俺が嫌がってるの分かってて……！」

「私だけじゃありません、これから来る娘全員に、提督って呼ぶように躰けてやります。」

「うわぁ」

「命令で止めないんですか？お願いでも良いですよ？」

「参った。降参だ。でも、そんな下らない事に、命令もお願いもしてやらん。」

「妙な所で意地っ張りですね、提督」
「うん。自分でも困ってる。」

嘘つきだなあ、この人。絶対困ってないし、治す気もなさそう。
でもまあ、さっきの言葉の方は、嘘は無いって信じてみてもいいかな。

私は東北の農家出身で、ちょっと気の強いだけの、普通の学生だった。

それが、2か月前に、いきなり徴用だとか言っ、軍の人が家にやってきた。

拒否権は無かったらしい。らしい、というのは、私に説明なんか無かったからだ。

家族に軍の人が説明して、私には一週間、別れの為の時間があるから、身の回りを整理しろってメッセージだけ。

冗談じゃない、軍隊って、それ、男の人が志願して行くだけのものですよ？

そりゃ、学校では、20年前の事を教わったけれども。まさか今になって、またこんな事が始まって、そして最初に選ばれたのが私って。どれだけの偶然なのよ。

と、普通の感情を持つのと同時に、もう一人の私も居た。

こんな所でずっと農家やっていくのは嫌だっ、漠然と考えてた。

国策で、食糧と資源を極限まで計画して生産しなければ、日本で餓死者が出る。だから、農業の大事さは分かってた。

それでも、私は自由に生きたかったし、その為なら割と、自暴自棄な事でもやらかす自信があった。

私が今まで大人しく出来てたのは、単に、家族や周りからの期待や

世間の目があったからだけに過ぎないんだ。

「もしかして、艦娘への適性って、案外そんな気持ちを見抜くもかもね。」

そんな話を、出発前夜に、お父さんにした。

お父さんは一瞬悲しい目をしたけど、私を見て、最後に頭を撫でていたっけ。

「艦娘ってのは、海に棲んでる『あれ』の眷属と戦うってことになってる。けどな、()」

「…だから、お前は、軍隊に行くとは思うべきじゃない。もちろん、命令は絶対だけどな、それを適当に解釈して生き延びるのも、女の役目だ」

お父さんは、そんな事を言ってたような気がする。

はは、あのババアの言う通り、素材となった艦艦装の代わりに、元の名前を取り上げられるってのは、ちょっと辛いな…

絶対にあいつを名前なんかで呼んでやらないのは、ちょっとした仕返しのもり。

「で、好き勝手やらせてもらって、一週間経ったわけですけど？」

提督室の扉を勢いよく開けて、机で考え込んでる提督に詰め寄ってみた。

「この一週間、熊野の忙しさが嘘のような平和な時間を過ごしてしまった。タダ飯食って、ちょっと海に立ってみたりするだけ。」

「冗談じゃない、私は20年ぶりの艦娘なのよ?!

そりゃ、適正があるからって徴用された時は絶望したけど、だからって何もしないで一人の時間を過ごさせるほど、ぐうたらじゃありません。

だいたい、何よあの美味しいご飯は。魚とご飯が少しだけって食事で育ってきたのに、肉だの果物だの、有り得ないでしょ?」

そんな事を口早にまくしたてたような気がする。

「あー、そうか、漣はダラダラしてるの苦手か。」

「誰だって苦手に決まってるます!」

「いや、そうでもない。俺は結構ダラダラしてるの好きだぞ?」

「ああもう、そういう意味はなくてですね」

と、ここで提督のヤツ、真顔に戻りやがった。

「うん、まあ確かに、考えててもしょうがない。ここはやっぱり、一回戦いに行かないと何も分らんか。」

「そうよ! 考えててもしょうがないです! だから...え? 戦いに? いきなり?」

「いきなりも何も、お前が何かさせるって」

「それはそうですね」

「うん、そういうわけで、まずはちょっとお出かけしてみようか。」

「お出かけ...戦いに行くのがお出かけ...」

提督が、机に広げた海図に、模型の船を置いた。

「そうだね、まずは、ここまで行ってみようか。」

「そこって、たった10キロ先かそこらですよね」

「うん。で、今までの履歴や調査からして、ここまで進めば、何かは出てくる。まあ恐らく、雑魚のはずだが。」

「雑魚はいいのですけど、その後は？」

「戻ってくる。」

「戻ってくるって。その先には行かなくていいんですか？私の戦力でどこまで行けるかとか確認する為に、行ける所まで行けとか命令が出るものなのでは？」

「一戦して戻ってくる。これは、初日で話をした時の言い方で、命令の方だ。」

ん？戻ってくる？

「あの、提督、戦いに行くのは私ですよ？」

「ああ、そうだな。」

「戻ってくる、じゃなくて、帰ってこい、ですよな？」

「ん？ああ、これは言ってなかったな。すまないが、出る時に、肩に俺を乗っけて行ってくれ。」

は？今この提督なんて言いましたか？

「提督？このタイミングで冗談とか言つと、この砲口を口にぶっさしますよ？」

「あー、うん、悪いが、熊野で教わった戦い方と歴史は一旦忘れてくれ。艦娘だけを戦場に送るといふ、今までの戦い方ではダメなんだ。よつて、俺も戦場に行く。」

「はあああ？提督死にたいんですか？生身の人間が行って何をするっていうんですか？砲弾あたると痛いじゃすまされないですよ？」

「うん、まあ、知ってる。なんで、戦いに邪魔にならないように、取り付け型の艦橋を作ってもらった。旗艦にはこれを付けてもらって、作戦をしてもらう。」

「いや、艦橋って。別に弾が当たる事を防ぐことが出来る訳じゃないでしょー。」

「そうだね。なので、気を付けて戦ってくれ。」

「気を付けるだけで弾が避けられるなら、苦労しないです！」

「その辺は、期待している」

「私も初めての戦いになるのに、何を期待するっていいのですか！」

「この提督もつめちやくちゃじゃないですか。

艦娘がひとたび海に立てば、艦装の力で大型化するし、自分自身は勝手に水上を動けるけど。

よりによって、後付けで艦橋？それに提督が乗る？そんな話、歴代艦娘の戦いで聞いた事ない。

「これはな、前から決めていた事なんだ。」

提督は、今までにない真剣な顔で切り出した。

「もう一度、熊野の最初の授業を思い出してくれ。艦娘は、過去の大戦時に建造された船の一部を素材とした、その艦装の力で、戦う。

何故単なる船の材料が、装備出来るような形を取り、人間の女性に装着可能になるのか？」

「そして、燃料とか弾薬とかが、何故あんな小型化して持ち運べてしまうのか？」

地水火風の4つの力が、鋼鉄、燃料、弾薬、ボーキサイトという名で結晶化される。この結晶の生産も含めて、全て、あの熊野の巫女達の手の内ではない。」

「要は、超常の力だ。敵である深海棲艦も同じく、物理じゃあない。思念とか怨念とか言う、そっちの世界の産物だ。」

「そこで君に聞きたい。その艦装が付く前と後で、君は感情の動きが変わってないという自信はあるか？」

はっ、と思いきらされた。

そう、私は素質はあったかもしれないけれど、普通の農家の娘だっ

たはずで。

そんな、行ける所までいかなきゃと思うような、目出たい思考は持ってなかったはずだ。

もつとずるく、生き延びる事を考えてたはずなんだ。

「恐らく、その艦装には、本当の意味で、元の軍艦に乗っていたであろう人達の、思念が取りついている。そして、その思念は、戦う事しか考えていない。

いや、戦う事しか教えられなかった人の思念ばかり、だと言つべきか。」

呆然となる私に、提督は続けた。

「もつ少し、君を知ってから話をすべきだったと思う。これは本当にすまない。その上で、一番大事なお願いがあるんだ。良く聞いてくれ。」

恐らく、この後にもどんどん徴用され、ここに来るであろう艦娘達がいる。そして、まだこれは予想でしかないが、別の形で参加する艦娘もいるはずだ。

その艦娘達全員に、この話を上手く伝えられる自信はない。私は、女性の事を良く知らないからね。

そして君は、最初にここに来た事で、この空気、雰囲気といった物を作る側の立場だ。後から来る艦娘達は、皆、君が私とどう接するか、どのように戦うのかを見る事になる。

君が毎回出撃しなくても良いほど、艦娘が揃ったとしても、その最初の雰囲気は、ずっと伝わるはずなんだ。

その時、ここを軍隊ではなく、人間の世間になるように動いてほしい。艦装に動かされ、戦いに飲まれる形では、あいつらには勝てない。前の戦いと同じ、悲惨な結末を迎えてしまつ。

ふざけていても、私をからかうでもかまわない。むしろそれが女の子が集まった場所にふさわしい。そういう空気にしてほしいんだ。

常に、人間である事を実感できる事。そして、戦いの最中でも、人である事を忘れない。そういう流れを、君に託したい。」

「そのお願いと、戦いに行くのに提督と一緒に行くというのも、関係がしたい。」

「ああ、そうだ。戦いに夢中になってしまった時に、引き戻す。それと、もう一つ重要な役割もあるんだが、それはまたの機会に話すことにしたい。」

「この提督、ようやく中学出たばかりの私に、なんて重い役目を背負わせるのかな。全く。」

そうじゃなくても、艦娘にされたってだけで、こっちは自分の心と折り合い付けるのに必死だったのに。更に上乘せとか、重すぎじゃない？

「…すべてが終わる時が来たら、今までのお願いと無茶振りと命令の分、全部返して貰いますよ、提督。」

提督は一瞬うろたえたように見えたけど、すぐに笑顔になった。分かりやすいなあ、コイツ。

「ああ、よろしく頼む。あと、後半のお願いの方は、無理はしなくていい。出来る範囲で。」

「そりゃそうですよ。私より年齢が上の人だって一杯くるのでしようし。その人達には、こっぴってやるつもりです。」

「ん？」

「ああ、提督？アレはどいつも童貞っぽいから、適当にあしらえばいいですよ」

あはははは、提督膝ついてる。これは面白いかも。

そしてどっちら、私は、軍艦で有る前に、娘でいつづける事が出来

るみたい。

返してもらおう内容は、そうね、考える時間だけは一杯ありそうだから、ゆっくり考えさせてもらおうつもり。

数日後、「お出かけ」した結果は、言うまでもなく、勝利だった。

勝利というか、敵を見つけて、適当に砲を撃ったらすぐに沈んじゃって。そのまま引き返したただけだったけど。

提督は、少し長い間、敵が沈んだ海域を眺めていたけど、あれは一体なんだったんだろうなあ。

まあいいか。その内つつけば教えてくれるだろうし。

そういえば、明日には、新しい艦娘が着任するって言うってたっけ。

「漣から見ると年上で、更にちょっとウザいかもしれないが、まあ面倒みてやってくれ。悪い娘ではないみたいだからな。」

はあ。結局そういう役回りかあ。

どうやったらいいかなんて分かんないけど、やれるだけやってみるね、提督。